

長辻 幸（2022年度日本英語学会賞（著書）受賞）

このたびは、拙著 *The Pragmatics of Clausal Conjunction* に対し、2022年度日本英語学会賞（著書）という栄誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。このような身に余る賞をいただき、大変光栄です。まずは、審査にあたってくださいました選考委員の先生方、そして、学会賞委員会をはじめとする事務局の先生方に深謝申し上げます。

本書は、2018年1月に奈良女子大学へ提出した博士学位論文に加筆・修正を施したものです。博士論文をご指導いただき、審査にもあたってくださいました吉村あき子先生、審査委員として貴重なご質問・コメントを多数いただきました須賀あゆみ先生、今野弘章先生にこの場をお借りして感謝申し上げます。

本書は、日英対照研究に基づく節連言構造の解釈メカニズムの解明とそのモデル化により、当該現象の全体像における核心部を明らかにしたものです。節連言構造とは、節レベルの要素を等位的な接続表現でつなぐものであり、英語では、等位接続詞 *and* を用いた *and* 連言文のことを指します。*And* 連言文は、*and* で接続された節で描写されている事態の間の様々な関係を伝達することができ、例えば、“John missed the usual train *and* he was late for work” という *and* 連言文発話は、「ジョンがいつもの電車に乗り遅れた」とことと「彼が仕事に遅れた」ことが因果関係にあると解釈されます。また、昔の同級生との関係を尋ねられ、“We still keep in touch, *and* we sometimes go out for a meal” と返答している *and* 連言文発話は、彼らが「今でも連絡を取り合っている」とことと「時々食事に出かける」ことのそれぞれが、「彼らは数年来の親友だ」といった推意を導く別々の証拠として並列的な関係にあると解釈されます。一方、日本語には、英語の *and* 連言文に対応する節連結構造が複数あり、文脈に応じて細かな使い分けが観察されます。前述の *and* 連言文発話の場合、前者に対しては、「ジョンはいつもの電車に乗り遅れて、仕事に遅刻した」のように、テ形構造が用いられ、後者に対しては、「私達は今でも連絡を取り合っているし、時々食事にも出かける」のように、シ構造が用いられます。本書は、英語の *and* 連言文とそれに対応する日本語の節連結構造の分析を通して、①節連言構造の解釈は、「関係的推論」(relational inference) と「独立的推論」(independent inference) の2つの推論パターンの区別により説明されること、②節連言構造の解釈メカニズムは、この推論パターンの区別を根本的な特性とする二分法によってモデル化されること、の二点を結論づけました。

拙著において、英語の分析は中心ではないかもしれませんが、しかし、日本語の分析から、日英対照の視点で、節連言構造という現象一般に多少なりとも説明を与えられたのだとしたら、それは意義深いことです。今回の受賞は、これまでの研究の方向性が決して間違っていなかったことを示唆してくださっているようで、大変喜ばしく思います。

節連言構造に関しては、解決すべき課題が多数残されています。今回の受賞を励みに今後も研究活動に地道に取り組み、より一層の研鑽を積んでまいりたい所存です。このたびは、誠にありがとうございました。